市民大学講座第４回（平成 16 年 10 月 18 日）

―書物が語る近世柏崎の文人―

柏崎市立図書館　関矢 隆

[題名に対する私のとらえ方]

書物　　図書館**資料の紹介**

近世　　江戸幕府創立以後明治維新まで（**江戸時代**）

文人　　「広辞苑」　**ぶんじん**

①文事にたずさわる人。⇔武人

②詩文・書画など、文雅なことに従事する人。「文人墨客（ぼっかく）」

「文人画」（文人が余技に描いた絵の意）主に水墨淡彩で、筆意を尊び趣致・風韻に富脱俗の風がある。南画の一。

参考　「書道基本用語詞典　中教出版　Ｈ４」から「文人の書」引用

・・・文人の語は、古く「詩経（しきょう）」では文徳の人を意味し、のちに文学者の意に用いられたが、唐（とう）・宋（そう）の頃から新しく詩書画に長じ文房の趣味生活をする人の称呼（しょうこ）となった。

・・・唐・宋に至って詩書画の三絶（さんぜつ）を兼ねそなえることが文人の理想的あり方となった。

・・・わが国では、江戸時代の儒学（じゅがく）一尊による漢学隆盛の基礎のうえに、中期に至って、中国文化に対する憧憬（しょうけい）が生じ、求道者としての儒者から風流な漢詩文や書画の世界へと誘（いざな）って、いわゆる多くの文人を生みだした。

・・・したがって文人の書（画）は、淡白・簡素・天真を基調として俗気（ぞくけ）なく、奇古にして自然の妙を得、しかも博く高い学問・趣味・教養に裏打ちされた高尚な人格の反映として高雅、清逸（せいいつ）な書風（画風）である。

近世柏崎の（1615～1867）文芸年表

―「柏崎市史中巻年表」と「柏崎編年史上巻」抽出による―

＊「柏崎編年史上巻」からは項目のみを抽出したが、項目内要の中から関係事項を（　）で入れた。

＊「柏崎市史中巻年表」は漢文学記事が少ないが本文に詳しいが、本文からは抽出していない。

＊ 私的に年表を詳しくするには、**「柏崎文庫（甲子楼文庫）**関甲子次郎筆 20 巻（大正１１）・スクラップ 13 輯」、**「名家遺響**　関甲子次郎著　高桑儀作発行 M38」を参照するとよい

＊ 太線は年表の中から紹介したい人、資料

＊ **藍澤南城**が入っていないのは、「柏崎編年史」が北条と合併前の刊行だから

＊ 名前のルビは本名・詩号、歌号等あってママ（参考のため振った）

1689　元禄 2.7.5　　芭蕉、出雲崎から柏崎を経て鉢崎に宿る　　**「曽良随行日記」**

（元禄 13.5.7　俳人吉井雲鈴が来柏）

（元禄 14　俳人各務支考来柏）　　「柏崎年譜」

（元禄頃　俳人池西言水来柏）　　「柏崎年譜」

1703　元禄 16.11　　**「俳諧柏崎」**刊行さる　　「原本中村文庫」「柏崎年譜」

1705　宝永 2　　俳書**「柏崎八景」**選せらる「西本町岩下氏所蔵」「写本柏崎図書館」

（宝永 5　俳人各務支考来柏）　　「柏崎年譜」

1715　正徳 5.3.9　　**俳書柏崎四十八題**刊行さる　　「中村文庫蔵」「柏崎年譜」

（享保 12　俳人各務支考来柏）　　「柏崎年譜」

1751～1763 宝暦年間　この頃より柏崎町に寺子屋はじまる（伝）　　「柏崎文庫」

（以下明治までの寺子屋手習い師匠があげている）

（延宝天和の頃　堀部安兵衛の父中山某？）（宝暦年間　西河長照）（寛政時代　斉藤伊右衛門）（竹内忌蓮）（森幡龍）（徳原泰輔）（田代鶴眠）（大平恬処）（澤田哲居）（市川日休）（かさや先生、柏井昌輔）（山田粂吉、緑斎、中村篤之助、梨郷）（中野力税）（原甚右衛門）

1765　明和元　　俳人五老峯を迎え柏崎俳壇賑わう**「俳諧三日坊」**「柏崎文庫」「柏崎年譜」

（俳諧三日坊　明和 2 中村二英等筆）

1806　文化　　**龍門舎詩集**刊行さる　　「柏崎文庫」

1807　文化４　　白川風土記成る　　「梨郷随筆」

1811　文化 8　　**原松洲**柏崎に塾を開く（文政元　文衡山詩鈔二冊刊行）

「柏崎文庫」「柏崎年譜」

1814　文化秋　　十返舎一九柏崎の瓢宅に遊ぶ　　「金の草鞋」

1830　天保のはじめ　閻魔市はじまる（伝）　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

（天保 6.5.1貞心尼「蓮の露」成る）

1836　天保 7.9　**生田萬**柏崎に来り桜園塾を開く　「生田旗風」「樋口出羽御用留」

1837　天保 8.1.15　**松村規右衛門、宗悦**と改む　「柏崎文庫」

天保 8.6　生田萬ら柏崎陣屋に乱入す

1838　天保 9　**原修斎**帰郷して家塾を継ぐ　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

天保 9.4.29　詩人**植木無窮**没す　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

1839　天保 10.8.6　渡辺平太夫柏崎日記を書き始む

水落雲涛柏崎に帰る　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

1841　天保 12.3　**貞心尼**釈迦堂の庵主となる　「木村秋雨孝室貞心尼略伝」「柏崎年譜」

1845　弘化 2　**星野鵜水**病没す　「北越名流遺芳」「柏崎文庫」

1847　弘化 4　俳人**竹内鬼外**柏崎陣屋詰となる　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

1848　嘉永元　頼三樹三郎が来柏す　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

1859　安政 6　算者**村山禎治**柏崎で門人を指導す　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

1861　文久元 8.26　妙行寺に大書画展観会開催さる　関甲子次郎「考古帳二」

（**星野藤兵衛**主催、幹事；**星野鏡里・原修斎**・市川梅園・洲崎掬翠・**丸田桜亭**・勝田渓雨・・・、参会者；江戸の画工沼口山民・篆刻家の大八木間斎・高田の東條琴台・倉石乾山・地蔵堂の富取芳斎・三条の張嵐渓・加茂の雛田松渓・岡之町の**村山致堂**・南條村の**藍澤朴斎**・・・）

1861　文久　諸方より文人墨客続々来柏す　「柏崎文庫」「柏崎年譜」

（当時、柏崎の巨富名門は，上・下の市川、松村、小熊、ならや、宮川、西巻、**星野**、**山田**三家等があり、　学者では、**水落**、**原**、田代、**玉井**、久我、**星野（郷里）**、　歌人では玄精、喜当、**行貞**、敬孫、輝直、**茂樹**、**行雄**、則成、信之、茂雄、隆貞、行敬、貞一、真杭、**貞心尼**、敬枝、長義、**重世**、**重秋**、**静里**、**守雄**、尚寛、幸知、英績、敦直、　俳人は湖月嵐、藤北、一広、文泉、甫雲、五好、**司瓢**、**米花**、**鬼外**、**樵路**、四山、路芳、大宇、松水、**鶴眠**、松齢、梅月、壺中庵等であり、好事家として**戸田松園**兄弟、前川聞鶯、岸本雙観、平山安斉等、まさに柏崎全盛時代ともいうべし。されば他郡他国より入り来る人々多し。）

1863　文久 3.6.1　義人生田萬の墓碑が建立さる　「生田萬埋骨塔」「柏崎文庫」

1864　元治元 7.11　星野藤兵衛等大砲を献納す　「御賞美御咎其他諸伺留」

（元治元　竹内鬼外門下「法莚集」刊行）

「**俳諧　柏崎**」　上下２冊

書名別名　　「柏崎」
著者　　長井　郁翁編　（と藤野重英）、序文は京都の俳人富尾似船
出版　　京寺町二条上ル町　井筒屋庄兵衛　板
発行年　　元禄１６（１７０３）11
ページ　　上巻 33 丁、下巻 51 丁
大きさ　　23 ㎝
所蔵分類　　柏崎市立図書館　中村文庫（003－１）　（柏崎市立博物館に貸出展示中）

（写真１）表紙　　（写真２）序文「元禄十六年歳次葵未十一月下弦　芦月庵富尾似船」

書名は、題箋に「俳諧」が小さく横書に書かれ「柏崎」が縦に大きく書かれている。この結果「俳諧柏崎」をただ「柏崎」と称して語られていることがある。

編者長井郁翁は、通称與次右衛門、伴幽軒と号し、本町２丁目（西本町）の旅宿の主人。その家を本陣長井と呼んだり、その小路を長井小路（後いろはや小路）と呼ばれていた。享保 18 年（1733）５月に歿した。菩提寺は浄土寺。
（参考；**「俳諧柏崎－勝田忘庵」**越後タイムス S24・10・16）

[内容]　柏崎の俳人長井郁翁が京に上ったさい、京都俳壇の有力者（池西言水・爪木晩山・滝方山・中尾我黒等）と催した歌仙（36 句)、旅の途中の発句、緒家の四季発句、追加の連句などを加えて上下２冊にまとめたものである。越後の俳書として現存するものの中で最も古い刊本の一つである。（参考；**「新潟県県民百科事典－かしわざき（はいしょ）箕輪真澄」**　野島出版 S52、　**「越佐文学散歩　下」**　野島出版 S50）

「新潟県史資料編 11」（Ｓ58）では「本書は現存する越後俳書（刊本)」の中で最も古いものである。談林派に近接した俳書といえるが、内容・編集の充実ぶりは、柏崎のみならず広く越後全体の庶民文化の高さを示している。」と言っている。

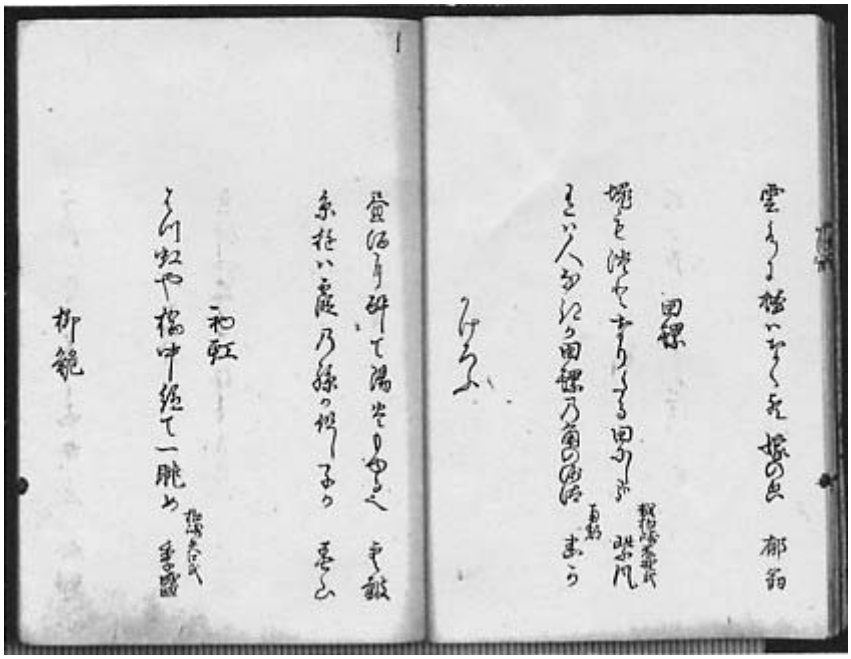
上巻の中に、長井郁翁と藤野重英とが一緒に旅した記事があるが、この藤野重英について。源右衛門と言い幼名は源蔵、重英とも称す。柏崎新町（扇町南面・料理武藤辺）に住す。享保７年（1722）正月歿。菩提寺は聞光寺。（**「柏崎俳諧史」桑山太市著**－高志路第 125～141 号 S23・9～25・1）

（写真３）　雲水に蛙ハなくか嫁の顔　　郁翁

田螺

魂も淡（泡）となりたる田にし哉　　越後柏崎藤野氏　紫風

有ハ人なきか田螺の角の沙汰　　南部　幽可

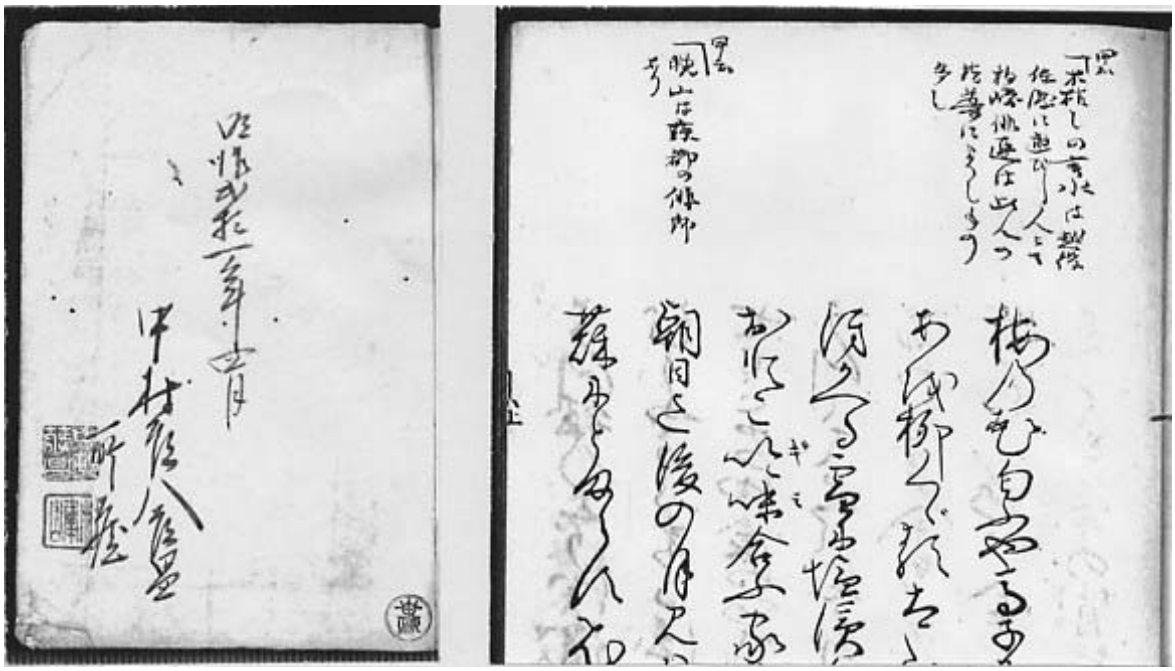


俳諧に現れる柏崎の人　―　桜井直水・島田鷺友・市川如柳・藤野紫風・矢口季盛・長井暁水・石黒丹頂・長井一〇・山田木枝・市川悠水・藤野重英・招月（姓脱）・吉田松夕・小牧北峯・長井郁翁・秋夕（姓脱)。

.＊「俳諧柏崎が出てから僅々十数年の後、同じ柏崎から俳句集小太郎といふのが出た。が、小太郎の編者市川筌滉の名がこの集中に見えないのは、異様に感じられるが、或は悠水といふのが改号したのかも知れない。」（**「俳諧柏崎－勝田忘庵」**越後タイムス S24・10・16）

＊桑山太市氏は「『俳諧柏崎』の書名はなにから出たのであろうか、わたくしは謡曲の『柏崎』から思いついたものであるように考えられる。」（**「柏崎俳諧史」桑山太市著**－高志路第125～141 号 S23・9～25・1）と言い、浄瑠璃「柏崎」にも触れている。
（謡曲「柏崎」・浄瑠璃「柏崎」については**「新潟県県民百科事典－かしわざき（はいしょ）箕輪真澄」**　野島出版 S52　、**「越佐文学散歩　下」**　野島出版 S50 を参照）
柏崎市立図書館が所蔵している理由＝大正７年に蒐集家中村藤八翁による中村文庫の寄贈

＊ところでこの本、上下 2 冊とも「明治二十一年四月　中村藤八　藤昌　蔵書」と署名されていて蔵書印が押されている。また、ところどころに「甲子楼主人曰」とか「甲云」とかで注釈書込みがある。甲子楼は明治大正時代の郷土史家・関甲子次郎のことで、研究される方は、その大著**「柏崎文庫（別名甲子楼文庫）」**（筆記 20 巻・スクラップ 13 輯・大正11）をみる必要があると思う。
（写真４）　中村藤八　署名・印　　（写真５）　甲云「　・・・　」



その他参考図書
「柏崎を中心とする俳句の歴史」庭山暁雲著（越後タイムス社発行　S53　193ｐ）
これはＳ８・１～Ｓ９・８まで越後タイムス紙上に連載した「柏崎と俳諧」を集大成してＳ53 に出版したもの

（**「柏崎八景」**一冊）

刊本を柏崎市立図書館で所蔵していないが、「越佐研究」第 46 集（H 元・３新潟県人文研究会）に、「**資料紹介　翻刻　長井郁翁編『柏崎八景』**」として矢羽勝幸氏が紹介している。それによって目録カードを作成すると次のようになる。

書名	柏崎八景　　内題「越　柏崎八景」
著者	長井　郁翁編　　序文池西言水　無署名序文２文
出版	京都　井筒屋庄兵衛　板行
発行年	宝永２（１７０５）８
ページ	４７丁
大きさ	22×15.4 ㎝

[内容]　最初に越後柏崎の八景に因む句をかかげる。八景とは、柳橋夜雨・鏡沖秋月・栄松晩鐘（栄松山＝浄土寺）・下宿帰帆・米山晴嵐・.鵜川夕照・黒姫暮雪・中浜落雁で郁翁の選定したこの八景に、郁翁・藤野重英の二人と池西言水・中尾我黒等京都俳人６人がそれぞれ１景につき１句を詠んでいる。その他、百韻と緒家の発句を収める。（参考 ;「**新潟県県民百科事典－かしわざき（はいしょ）箕輪真澄**」野島出版 S52、　全文は「**越佐研究**第 46 集」（H 元・３新潟県人文研究会）に、「**資料紹介　翻刻　長井郁翁編『柏崎八景』**」矢羽勝幸著でみることができる。）

また矢羽勝幸氏は同書で,「その編集方針にはすでに地方文化の萌芽が見え、柏崎俳壇の質の高さをうかがうことができる。また本書の趣向は、さらに十年後同じ柏崎の市川筌滉にうけつがれ『小太郎』（正徳五年刊）として結実する。」と言っている。

＊「福浦八景」について

・「福浦八景」は明治期に柏崎沿岸の風景を選定したもの。**「新潟県における八景の分布とその風景について」**（木伏理子　）？

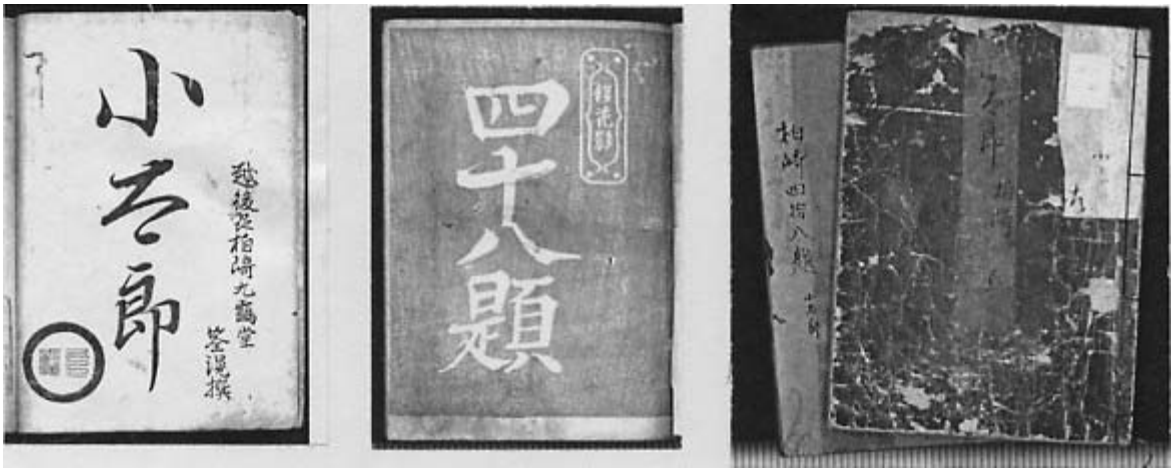
・米山福浦八景県立自然公園（Ｓ34 指定）＝浦浜・八坂神社・番神堂・御野立公園・鯨波海岸・福浦・芭蕉が丘・米山（**新潟県民百科事典**）

・佐渡弥彦国定公園（Ｓ25 指定）～　佐渡弥彦米山国定公園（Ｓ56・3・16 指定）＝ 米山山岳と福浦海岸部を編入して名称を変更、またこれを機に「福浦八景」の見直しを行い、新しく「米山福浦八景」として、番神岬・御野立・達磨岩・福浦猩々洞・鴎ヶ鼻・松ヶ崎・牛ヶ首・聖ヶ鼻を選定。**（柏崎日報Ｓ56・3・18、Ｓ56・12・28）、「ふるさと見てある記」**（東京電力）

「小太郎」柏崎四十八題　乾（けん）・坤（こん）二冊

（写真６　表紙　題簽（だいせん）＝「小太郎　柏崎　乾」）　（写真７　扉＝「四十八題」）

（扉裏＝「小太郎　越後州柏崎九鶴堂（きゅうかくどう）　筌滉（せんこう）撰」）



書名・別名　「小太郎」・「柏崎四十八題（かしわざきよんじゅうはちだい）」・「四十八題」

著者　市川　筌滉（せんこう）編

出版元　不明

発行年　正徳５（1715）３

ページ　乾巻 30 丁、坤巻 36 丁

大きさ　22×16 ㎝

所蔵分類　柏崎市立図書館　中村文庫（003－2）　（柏崎市立博物館に貸出展示中）

[内容]　柏崎の名勝四十八か所に関する緒家の発句を集成したもの。序文は藤野重英・長井郁翁、跋文は吉井雲鈴。雲鈴の跋文（ばつぶん）によると、本書は「俳諧柏崎」、「柏崎八景」二書の続編として編まれたものと記されている。

（写真８　跋文（ばつぶん）（坤（こん）巻）＝吉井雲鈴）

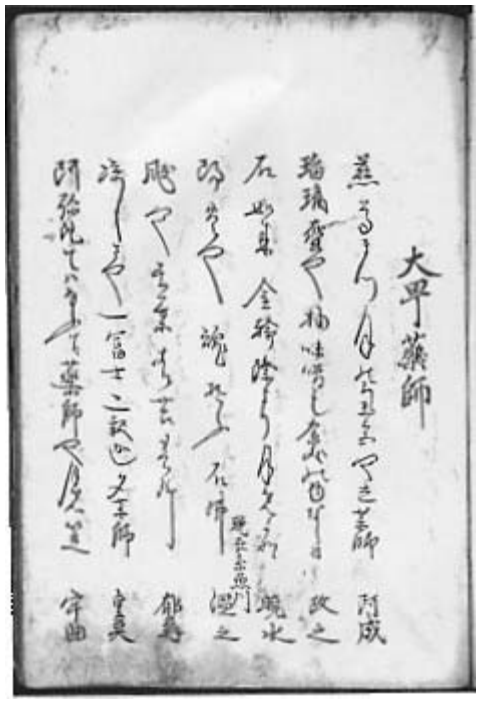
「柏崎の老集を作りて小太郎とよふ、此地に郁翁（いくおう）ありてかしハ崎の二篇をあらはす、さるハその後集なるへし、巻頭ハ尊句にはしまりおほくハ老人の句あり、跋せよと也、唯風雅の過去帳とおほえて南無仏と廻向申侍る、

越後国出雲崎　茶九連寺開山

雲鈴」

「俳書『小太郎』の名前は謡曲『柏崎』から来ている。」（**「柏崎俳諧史」**桑山太市著－高志路第 138 号 S24・10）
「筌滉とは市川與三次であって、享保二年正月七日歿、・・・菩提寺は西光寺である。」（**「柏崎俳諧史」**桑山太市著－高志路第 138 号 S24・10）

次に**「新潟県史　資料編 11」**（S58）から、「小太郎」の解説を引用する。
「作品はすべて発句のみであるが、二題一組とし、はじめに必ずその実景を描いた挿絵をのせる。狩野派風の誇張した固い画風ではあるが、当時の姿を伝えるものとして貴重である。」
「作品を寄せる人々は、越後のみならず、全国各地にわたり、大名・貴紳・から遊女・少年にいたるまで有名無名さまざまである。池西言水や焦門作家として知られる北枝・智月・園女・涼莵・支考・尚白・李由・正秀などの作品も採られていて、本書の価値を高めている。・・・地域性豊かな内容は、地方文化の萌芽を感じさせる。」
（写真 9）



大町　薬師
慈尊まつ月の気色や立薬師　　阿成
瑠璃壷や柚味噌も余処の物ならす　政之
石如来金輪際より月見かな　　暁水
陽炎や魂遊ふ石仏　　現在糸魚川　温之
颯や青葉青苔其所　　郁翁
涼しさや一富士二釈迦夕薬師　　重英
阿弥陀てハなふて薬師や月見笠　　宇曲

挿絵は「有名な久住守景の子胖幽が佐渡への途中、柏崎に立寄ったのに囑して書かせたのだと傳へらる。」（**「今は昔柏崎四十八題」**越後タイムス S24・９・25、勝田忘庵？）

この絵が、当時の柏崎を偲ぶ貴重な資料として諸書に引用されるので全部紹介する。
説明は、**「今は昔 柏崎四十八題」**（越後タイムス S24・９・25～12・18、勝田忘庵？）から引用したり、今の町名に合わせたりしている。詳しくは原著から研究していただきたい。

住吉の林鶯

住吉さんは西本町２丁目の石井神社。昔は境内も広く樹木も繁茂し、竹林があった。

明治の大火に２度遭った。

戎山の麦秋

戎山は中浜から番神へ向かう途中。よろんごの大木があったという。えぞ塚とも言ったそうだ。

銭山の青芝

銭山は今の西本町八坂公園のところ。砂山があった。

祇園の沙鷗

八坂神社は今より北の方にあって、創始の頃は祇園神社と称していた。

歓喜山の暁鐘

歓喜山は西本町３丁目（旧町名は鵜川町）の浄興寺の事。

霊石地蔵

西本町３丁目（旧町名は扇町）の喬柏園脇にある「根埋地蔵」の事。銘じの初めまで道路の真ん中に東向きにあったという。

小町の石室

石室は西本町２丁目の永徳寺境内か通りにあったという。

霊石薬師

西本町２丁目（旧町名は大町）にある「立地蔵」の事。

道路上に南面して立ち、ちょうど旅人の道標のようだ。

飯涌山牌堂

飯涌山は西本町３丁目の香積寺。

牌堂とは柏崎勝長公の位牌を祀った所をさしているのであろう。

竈馬古橋

香積寺付近にコオロギ橋があったが、どこにあった橋か諸説有り。

正行寺の江流

西本町１丁目の聞光寺と旭小路の間にあったという。

「往昔は一宇の御堂なりしが、いつしか荒れ果て唯流れのみ残る」

真光寺の夜市

真光寺は西本町１丁目のボンオオハシ店近くの駐車場、貞心尼の晩年のいおり不求庵の標柱がある所。

田んぼのような絵も見える。ここから鏡が沖が見えるという古書記事があった。

帰敬山納涼

帰敬山は西本町２丁目の西永寺。高台で佐渡も見え納涼は快適であったであろう。

長汀網引

長汀とは長く続く景色のよい海辺、裏浜今の「雷音」の当たりか。

昭和 30 年頃までは地引網で、鰯や鯡が大漁だったとか。

山王の黄雀

日吉町雀森公園の鏡日吉神社の雀森は、鎮めの森から転訛したという。団子山という砂丘があり桃やイチゴ畑があった。

熊野の清泉

権現小路（越後タイムス社付近）の南端に熊野権現の祠があり、水がこんこんと湧き出ていたそうだ。

海岸山幽栖

海岸山は妙行寺（西本町１丁目）の山号。高台にあって境内が広いので、いかにも静か。幽栖とは俗世間との交渉を絶った静かな住まい。

納屋の客船

納屋町（港町）には船頭衆が多く、出船入船でそうとう賑わったらしい。納屋は道具入れる小屋。

番神の夜泊

名刹番神さんは日蓮上人が佐渡から漂着した所。御野立と並んで日本海景勝の地。

佐渡への渡帆

昔は佐渡通いは寺泊と柏崎で占めていたという。「来いと云うたとて行かりょか佐渡へ　佐渡は四十五里波の上」は柏崎からの距離を示している。おべんとうきちの情話も生まれる。

月皓山の稲荷

月皓山は西本町１丁目の遍照寺。.境内に稲荷さんがある。初午の祭典をしていた。

無量山の蓮池

西本町１丁目の聞光寺,中央幼稚園のある所。蓮池があって夏の早朝蓮見の風流人を楽しませたという。

塔の輪の群牛

塔の輪は大昔は繁華の地だったらしい。「塔の輪千軒柏っ原」という言葉が残っている程で、下宿（番神）に対する上宿だったのかも知れない。

「小太郎」が出来た頃はすでに原っぱとなっていて、佐渡から仕入れた牛は塔の輪・鯨波一帯にに放牧していた。

天満の故園

塔の輪の南方信越線を越えた当たり（現在の天神町）に平地らしい所があり、ここを天満屋敷と呼んでいた。天満宮が祀られていたのであろう。

旗持孤峰

四十八題中昔も今も変わらない姿。西の頸城海岸から東の刈羽平野を見渡せる番城。

神明の苗代

東本町１丁目モーリエ裏（田町）の園通寺の向かいに神明さんという社があった（明治３年頃まで）。この神明社から一面の田んぼが見渡せたという。

汐込の芦花

旧枇杷島村の柏崎駅付近に字汐込（しおごみ？しおいり？）という所があったそうだ。

満潮時の海水がこの辺まで鵜川を逆流するのでこの字名があったようだ。

橋末の松山

この橋どこの橋か判然としない。鯨波のあたりか、鵜川にかかる橋か、「小太郎」の頃（1715）かかっていた橋。

比角の柳塘

白竜公園・ねずみ塘の所。

ねずみ塘は干ばつ時に備える人口の貯水池だったとする。「小太郎」時代すでに名勝となっていた。

焔魔の夜灯

大正ころの閻魔市の絵葉書を見ると、閻魔堂のあたりは繁華しているが、「小太郎」時代 290 年前は、ものさびしい場所にぽつりと建てられていたことをうかがわせる。北国街道、魚沼街道から来たのか旅人がいる。

諏訪の遊蛍

諏訪さんは、明治９年に柏崎神社と改称するまでは諏訪小路（西本町大光銀行脇を下がる道）下のビリヤード場辺りにあった。その昔は、須賀町の遍照寺と聞光寺の間にあったが、文化年間に焼失して移ったという。その昔は田んぼもあり、蛍の名所だった。

石橋の暮蛙

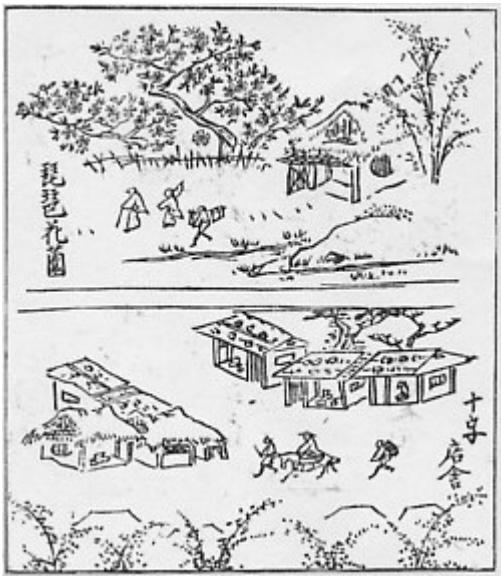
柳橋の不二屋旅館近くにほんの小さな流れがあって、付近に住んでいた素封石橋藤太の苗字に因んで呼んだという。蛙の鳴き声に風情を感じた頃の事・・。

雙林の桟門

290 年前の「小太郎」に描かれた立派な建造物。どこの寺の山門だろうか。

瀘鞴の夜光

大久保鋳物の素は近畿河内泉山で越後に流れきて鯨波の山奥に陣取り、それが大久保に移り鋳物で名を揚げたという。



琵琶の花園

枇杷島城址に植えられた梅・桜などを鑑賞していたのであろう。その後ここは荒廃して果樹園になったり、製糸工場となるがすたれ、農業高校となったという。

十字店舎

十字店舎の場所は広小路と旭町島町とが交差する四つ角（文英堂・魚場あたり）をいう。ここは当時から常設市場のように賑わっていたようだ。

三島神松

県社三島神社（剣野町）は天平 13 年の創立で（1260 位前）延喜式神名帳にも見え由緒ある神社。

長野の善光寺からお参りにきている。

洞雲禅寺

常盤台の洞雲寺。貞心尼のお墓のある寺。その昔は山の上にあったとか。

八幡の宿鴉

八幡さまは枇杷島鵜川神社の事（宮場・新道？）、境内には欅の大樹がある。

金廊の鮭簗

枇杷島から剣野へ抜ける唯一の橋であった金曲輪橋。この辺にのぼってくる鮭の簗があった風景。鮎のいるきれいな川だったが、汚れたのは明治ころからの石油産業の発展からだ、と「今は昔 柏崎四十八題」の著者は言っている。

塩屋の煙霧

終戦前後の苦しまぎれの製塩すがたとちがい、自給自足時代の浜での塩焚き風景。

三石潮音

鵜川河口から番神への平坦な海岸に凹凸のはげしい岩礁が海へ突き出ていた。その岩を北海の荒波が打ち砕いていた。今は港公園前のコンクリートの下。

屋型(おくがた)の岩窟

場所に２説があるという。ひとつは鯨波の鬼穴あたり、ひとつは番神下。どちらも言い伝えがあるようだが、小太郎編者はその句から鯨波を選んでいるようだ。

岩島の苔摘(のりつみ)

柏崎では雪海苔(ゆきのり)と言って、自然に岩についた海苔を寒中に採取する。

番神、鯨波、笠島などでとれたが、質か製法かに違いがあったという。

弥彦の山雲

万葉集に詠じられている弥彦、越後一ノ宮のある弥彦。晴れた日に椎谷の向こうの海にみえる弥彦山。弥彦に詣でた人も多かったであろう。

椎谷の崎嶇(きく)

番神岬から椎谷岬までさえぎることなくゆるやかなカーブで続く。柏崎人は椎谷の姿は眼に熟している。

「柏崎から 椎谷(しいや)ま～でぇ～ 間(あい)に～」

八石(はちこく)の飛流

八石には不動瀧と屏風瀧の二つの瀑布がある。藍澤南城もこの飛瀑を詩に詠んでいる。

芥川(あくたがわ)の千鳥

鯖石川河口は葦藪(よしやぶ)で野鳥がたくさん居た。橋がかかったのは安政年間（安政橋）。船頭が旅人を渡している。千鳥の鳴くねを聞くのは旅情であり、俳趣であったにちがいない。